



民芸調テーブルセット (商品名 つどい)



会社の外観

伝統の技術で作る 永く愛される民芸家具

(株)川野工芸

取締役 川野 清隆 さん

船指物とは、船上に据え置かれたタンシヤ機などを指す言葉。その昔、河川を往来して商売・交易をする船で用いられた。船指物には商売用の書類や道具等が収容されていたという。金庫としての用途もあった。筑後川流域でも船指物が作られていた。

の川野清隆さんにお話を伺った。
川野工芸は下駄箱製造メーカーだった。しかし三十年ほど前に父の後を継いだ川野さんは、船指物の流れをくむ民芸家具製造を志した。商品の差別化を図るためだ。ただ問題があった……。見本にできる民芸家具がほとんどなかった。川野さんは製作の技術をどこで学んだのだろうか。「勉強のため各地を回りました。技術を必ず自分のものにするとの気構えをもってです。倉敷、鹿児島などはたびたび訪れましたね。目当ての家具に出会おうと、持ち主に『是非見せてください』と頭を下げた





飾りタンス (商品名 130 車タンス)



飾りタンス (商品名 花模様)

ものです。そうするとほとんどの方は快く見せてくださり、家具の構造をつぶさに観察できました。」ひたむきな姿勢で修得したノウハウ。これが川野工芸が作る民芸家具の礎になった。

さてここで川野工芸が作る民芸家具の特長に触れておこ



引出しは「入れ込み」と「蟻組」の技術を用いて製造。民芸の命である金具は、真鍮、鉄を使い、錆が来ないように焼き付け塗装を施している。

一つは、主に桐を使用すること。もともと船指物には桐を使う伝統があったそうだが、なぜだろうか。「水上事故で家具が川に転落したとき、内部の書類や道具などを水分から保護するためです。桐には水を含むと膨張する性質があります。膨張して家具の隙間が小さくなると、内部に水が浸入しにくいのです。」

さらに船指物の「入れ込み」という技術も駆使する。これは「引き出し」製造のための技術。これにより隙間が狭くなり、びったりと家具本体に収まるのだ。一般に今製造されている「引き出し」はどうかというと、多くが「かぶせ」という手法が使われている。隙間が大きい。この「入れ込み」の技術は、昔、船指物の防水に役立った。しかし「今では家具内部の湿度調整に役立つています。乾燥している気候では木材が収縮し隙間が

開きます。逆に湿気が多いと木材が膨張して隙間が塞がります。こうして内部が適切な湿度に保たれるので、衣類や書類などを保護できるので「す。」

川野工芸にはリピーターが非常に多い。シリーズもののある製品を買っている。

川野工芸にはリピーターが非常に多い。シリーズもののある製品を買っている。

別の特長は、日本古来の「蟻組」の技術を用いること。釘やダボは一切使用しない。「これにより、その少ない耐久性のある家具になります。」

さて、塗装はウレタン塗装とカシュー漆の二種類がある。希望に応じて選べる。カシュー漆とは聞き慣れないが、どんな漆なのだろう。川野さんに説明してもらおう。「カシューナッツ」の殻から搾り出した油を原料にして作る植物油性の塗料のことです。漆に比べてリーズナブルです。カブれることもありません。光沢あふれる塗膜は一見漆と見分けがつかないと思います。」

家具に装着する金具類は、鉄と真鍮を使っていて、高級感を漂わせている。すべて川野工芸オリジナル。さびが出ないように焼き付け塗装が施されている。

例えば、彩り階段チェストという商品。側面の一方の片側が階段状になっている。(写真参照) 右下がり、左下がりの商品がある。その両方を購入されたお客様はこんな使い方をしているそうだ。「それぞれの階段面を向かい合わせに並べ、下から二番目の段に強化ガラスを置きテレビボードとして使っておられます。実に豪華で趣のあるテレビボードになっています。」

別のお客様は、「彩り階段チェスト」を玄関に置いて、階段面に着物の帯をは



彩り階段チェスト

川野さんの夢は何だろうか。「お客様の喜びと感謝の言葉は本当に嬉しいものです。それが作る喜びに繋がっています。手作りにこだわり、永く愛される、時代に合った民芸家具開発にこれからも取り組み続けていきたいと思っています。」

わせ、そこに花瓶やインテリア等を飾っておられます。上手い演出だと思いました。とても感銘を受けましたね。」

おもしろい話を聞いた。「現在朱塗りの家具がたくさん売られています。これまでの経験上ですが、景気が良くなると必ずと言っていいほど赤が売れます。赤を『自己流の景気指標』として見えています。以前より景気が良くなっているように思うのです。」赤と景気の関係は筆者も以前聞いたことがある。アベノミクスの効果が出ているのだろうか……。



存在感のある鮮やかな朱塗り